

|  |               |
|--|---------------|
| 研究テーマ：保健指向をもつ大学生の実践能力の開発プログラムの効果について<br>ーピアエデュケーションを用いた高校生への「生と性の健康教室」の実践からー     |               |
| 研究代表者（職氏名）：（県立広島大学教授） 藏本美代子  | 所属：保健福祉学部看護学科 |
| 共同研究者（職氏名）：（同教授）安武繁，（同助手）木村華子，（世羅高校養護教諭）児玉千恵，（尾三地域保健所専門員）溝上利枝，松岡明子，（世羅町保健師）矢山由起子 |               |

**はじめに：**本学では学校保健と地域保健が連携をとる形で、保健指向をもつ学生がピアエデュケーターとなって地域の高等学校に出向いて「生と性の健康教室」を実施し、高校生から高い評価を得ている。学生はピアエデュケーターとして、実践能力を開発するプログラムをもとに、基本的な生と性の健康に関する知識や情報を整理し、高校生との学習方法や情報の提示方法等を組立て、指導案を作成する。詩同案は地域検討委員会で検討した後、修正と確認を経て本年度の指導案として完成する。指導案に沿った展開の練習とリハーサルの実施、ここまでが計画・準備過程となる。「生と性の健康教室」の実施、事後評価の一連の過程を経験する。その中で、学生は多くの学びをしながら変化していくのであるが、学生がどのような「学び」をしながら実践能力を開発するのかという視点からプログラムの効果について検証することとした。開発プログラムの中で「学び」の要素と考えられる5項目とその他(自由なタイトルで記載)1項目の計6項目について、文章記述による調査を行った。

**目的：**保健指向をもつ本学学生が、実践能力を開発するプログラムをもとに、ピアエデュケーションによる「生と性の健康教室」を実践するために、計画・準備、実施、事後評価のプロセスを経験することで、どのような「学び」をしたのかという視点から、文章記述の調査を実施し、内容を整理し分析する方法を用いて、実践能力を開発するプログラムの効果について検証した。

**＜実践能力を開発するプログラム＞**プログラムの内容は、①生と性の健康についての学習会②事前調査結果から高校生のニーズ把握③健康教室の指導案作成と教材作成④学校と地域が連携した地域検討委員会に参加（健康教室の指導案の検討）⑤「生と性の健康教室」の練習・リハーサル、1回実施ごとに全員で意見交換を行い、グループワークのリーダーおよびサブリーダーの指導方法の修正を図る⑥「生と性の健康教室」実施日の時間行程と必要物品の確認⑦「生と性の健康教室」の実施と1クラス終了毎のミーティング⑧事後評価とした。

**研究方法：**調査内容は、「学習会での学び」「学生間の交流を通しての学び」「指導案、教材づくりを通しての学び」「リハーサルを通しての学び」「健康教室を実施しての学び」「その他(自由なタイトルで記載)」の6項目とし、ピアエデュケーターとして活動した本学看護学科学生20名を対象とした。調査期間は健康教室の終了後、調査研究と6項目の内容について説明し協力を得た。8月30日に配布し、後期授業の開始日10月2日に回収した。

**分析方法：**共同研究教員3名が学生20名の6項目の記述された全文から、「学び」の内容別に整理し意味が同一と考えられるものをまとめた。

**結果・考察：**健康教室は、M校2年生5クラス165名(男子63名、女子102名)、S校2年生6クラス202名(男子109名、女子93名)に実施した。2校の事後の満足度調査の結果、M校の平均値(8.4/10点)範囲(10-4)、S校の平均値(9.2/10点)範囲(10-2)であり、高い評価をしていた。

「学び」の内容は全体で309件を抽出した。抽出された内容は意味が同一と考えられるものを纏めて整理し分類した。「学習会での学び」は8カテゴリー(分析数53)、「学生間の交流を通しての学び」は4カテゴリー(46)、「指導案・教材づくりを通しての学び」は6カテゴリー(45)、「リハーサルを通しての学び」は6カテゴリー(57)、「健康教室を実施しての学び」は8カテゴリー(73)であり、学生は多くの「学び」を実感していた。「健康教室を実施しての学び」は分析数73と一番多く、「高校生の知識の程度」「高校生の意見を引き出す」「説明方法」「高校生とのかかわり」「高校生にとって健康教室の意味」「経験の意味」「健康教室への期待」「ピアの課題」の8カテゴリーに分類した。実践能力を開発するプログラムを経験することで、「大変貴重な経験をすることができた」「最善を尽くせた」「看護師になってこの経験を活かしたい」「勉強や練習は大変だが、すごく大切なことだと実感した」「自分のコミュニケーション能力の問題も改めて実感できた」等があげられていた。そして関わり方として「より主体的に活動できればもっともっと活動が楽しいものになっていくと思う」「やっぱり来年もやりたい」「一生に一度の貴重な体験でした」「今年の健康教室に参加してこれは絶対に必要なものだと確信した」等、積極的な関わり方をする事で多くの実践能力を高めることになることを、学生は経験の中から体得したことが示唆された。この調査結果から、実践能力の開発プログラムを通して多くの「学び」をしていたことから、実践能力を開発する効果的なプログラムであったことを検証し得たと考えた。